朱子の性理論（四）

青木晦藏稿

第八章　理想論

第二十二節　道の性質

吾人が天命を得て此の社會に生れ來りしは決して意味なきものにあらず。必ずその由りて來りし所以の理なくんばあらず。吾人は天の賦與する所に由りてその性を稟けその性中には人生に於ける一切の理を包容せるを以て一も性を離れて存するものなし。主觀的に云へば吾人は聖人となるべきものを具有するを以てその理を發現すれば聖人となり得べく、而して客觀的に云へば蓋し人生に於ける生活を全うして以て天地の化育を賛けて聖神功化の實を遂ぐるを得べし。更に云へば吾人は人生社會に立ちて自己の生活を全うすると共に社會全般の生活を全うして天人合一の境に到達すべき使命を享有せるものと云はざるべからず。子思の言を假りて云へば自己の性を盡し人の性を盡し進んで物の性を盡し、以て天地の化育を賛けて天地に參し天地位し萬物を育せしめんが爲めに生れ來りたるものと謂ふべし。所謂人生とは此の意味にして卽ち人が社會を成し一定の目的の下に活動す

る生活の全體を云ふ。而して吾人の生れ來るや皆天より此の使命を享けざるものなし。然るに此の天命を享けて之を自覺するものあり之を自覺せざるものあり。孔子の如きは五十而知天命。自己が天より所以然の理たる性を受けたるを自覺したるを以て所當然の理を受けたるをも自覺し進んで天下社會の爲めに自己の使命を盡したり。而して常人は聖人と同じく天命を享受したるも之を自覺するもの極めて少く只有數の賢人のみ稍自覺して社會の爲めに天命を盡さんとして活動する所あるに過ぎず。その他の凡人に至りては大抵醉生夢死の狀態に終り何等の發展に與る所なし哀しまざるべけんや。蓋し吾人が人生の生活を全うせんとするには一定の條理法則なかるべからず。此の條理法則を名づけて所當然の理と云ふ。而して此の所當然の理には二種の意味あり。(一)所當然の理とは理實そのまゝの生活に關する理法にあらずして將來に於て當に實現すべき或るものを豫想して設けたるものにしてカントの所謂假定的要求に外ならず。此の意味に於て之を名づけて理想と云ふ。儒學に所謂道とは卽ち是れなり。(二)吾人の當に要求すべきものは條理秩然として亂れざる純粹完全なるものにして、何人に取りてもその行爲の規範たるものならざるべからず。蓋し生知安行の聖人の如きは思はずして得勉めずして中りその性に有する所以然の理直に發して行爲と爲り所謂從心所欲不踰矩ものなるを以て理想を建設して進むべき必要なかるべし。然れども此の如きは吾人の理想としてのみ存することにして現實に於ては殆ど有り得べからざることに屬す。故に孔子の如

き聖人と雖も十有五にして學に志して理想を設立し之れが實現に努力せられ遂にその目的に達したり。況んや常人に在りてはその資質聖人に及ばざること幾何なるを知らざるを以て一の理想を建設して之に向つて進むべきは當然のことゝ謂はざるべからず。而して此の理想とすべきもの卽ち所當然の理に外ならず。

（一）道の根原　吾人の理想とすべき所當然の理卽ち道なるものはその由りて來りたる所を尋ぬればその根原は吾人の性に存し更に性の根原を尋ぬれば之を天に歸せざるべからず。董仲舒の「所謂道之大原出於天。」とはもと此の意味を言へるものに外ならず。而して此の意は前賢の既に言へる所にして朱子に創まりたるものにあらず。子思が性を以て天命に出づるものと爲して天命之謂性と云ひ、孟子が同じく「口之於味也。目之於色也。耳之於聲也。鼻之於臭也。四肢之於安佚也。性也。有命焉。君子不謂性也。」と云つて道德性を以て天命に出づるものと爲したるが如き亦此の意を述べたるものなり。然るに前賢の云へる趣旨を闡明して之を一の學說と爲したるものは朱子にして周程諸子と雖も遠く及ばざる所あり。今子思の所謂性道敎に就てその意味を說明して遺す所なし。故に曰く、

蓋天之所以賦與萬物。而不能自己者命也。吾之得乎是命以生。而莫非全體者性也。故以命言之。則曰元亨利貞。而四時五行。庶類萬化。點不由是而出。以性言之。則曰仁義禮智。而四端五典萬物萬事之理。無不統於其間。蓋在天在天。雖有性命之分。而其理則未嘗不一。在人在物。雖有氣禀之異。

其理則未嘗不同。此吾之性所以純粹至善也。（中庸或問大全、六頁）

此れ吾人の天性のもと宇宙の太極の賦與せられたるものにして太極と性との同體不二なることゝ、吾人に與へられた性は獨り吾人のみ特に享有するものにあらずして、萬物の享有するものと亦同體不二なることゝを明かにしたるものに外ならず。此の意味は既に理性論に於て述べたる所なれば復た贅するの要なかるべし。而して吾人の理想たる所當然の理卽ち道は亦性より發現したるものにして理想直接の根原は性に在りと云はざるべからず。かの子思が率性之謂道と云ひ、孟子が子思の思想を明かにして「惻隱之心。人皆有之。羞惡之心。人皆有之。恭敬之心。人皆有之。是非之心。人皆有之。惻隱之心仁也。羞惡之心義也。恭敬之心禮也。是非之心智也。仁義禮智。非由外鑠我也。我固有之也。弗思耳矣。」と云へるが如き皆理想たる道の性に根柢せることを明かにしたるにして、孟子の所謂惻隱羞惡恭敬是非の如きは所當然の理の內容を說明したるものと謂ふを得べし。而して朱子は更に主として率性の道に就て其の意味を明にして以爲らく、

蓋天命之性。仁義禮智而已。循其仁之性。則自父子之親。以至於仁民愛物皆道也。循其義之性。則自君臣之分。以至於敬長尊賢亦道也。循其禮之性。則恭敬祥讓之節文皆道也。循其智之性。則是非邪正之分別亦道也。蓋所謂性者。無一理之不具。故所謂道者。不待外求。而無所不備。所謂性者。無一物之不得。故所謂道者。不假人爲。而無所不周。尤可以見本命之本然。初無間隔。而所謂道者。未嘗不

在」是也。是豈有」待」於人爲。」而亦豈人之所」得」爲哉。（同上七頁）

蓋し性と道との關係を云へば性は體で道は用であることは朱子が「性是體。道是用。道便是裏面做出底道理。」と云へるが如くにして道はもと性より發現したるものなれば性は道の根柢に外ならずと云はざるべからず。而して性は天の賦與したるものなれば道は直接天に出づるものにあらずと雖も、その根原に溯れば天より出づるものと云はざるを得ざるを以て董子は此の意味により道之大原出」於天」と云へるなり。而して道とは何ぞやと云へば大は惻隱羞惡恭敬是非の情に關する道より父子の親君臣の義夫婦の別長幼の序朋友の信に至り、小は一擧一動一語一默一進一退一出一入に及ぶまですべて道にあらざるものはなし。然れども之を總括して云へば仁愛の道に外ならず。此の仁愛の道は現象に現れたる所に名づけたるものにしてもと仁の性に本づけるものなり。而して此の仁愛の道は之を發しては惻隱羞惡恭敬是非の四端となり、父子君臣夫婦長幼朋友の五倫となり、動作語默進退出入の微となり日常凡百の行動に至るまで盡く關せざるものなし。是れ道の性質の自然に出づるものにして人爲に出づるものにあらざるなり。故に聖賢の敎に在りては吾人の性の自然に循ひて道を行ふものと爲して作爲修飾によりて然るものと爲さゞる所以なり。朱子が「所」謂性者無」一理之不」具。故所」謂道者不」待」外求。」而無」所」不」備。所」謂性者無」一物之不」得。故所」謂道者不」假」人爲。」而無」所」不」周。」と云へるは此の意味を明かにしたるものと謂ふべし。

吾人の道なるものは此の如く人爲によりて成れるものにあらず全く天理の自然の現れたるものに外ならねば、聖人が社會の上に在りて敎を立つるも、自然に現れたる人道に就て之が法則を立てたるのみにして決して新に敎則を作り出したるものにあらず。蓋し吾人は性の發するまゝに從つて之を行へば行ふ所卽道にあらざることなけれども、是れ獨り聖人の如き理想の人格者のみ爲し得べきものにして常人の爲すを得べきものにあらず。常人は所當然の理の觀念を固有すること聖人と異ならざれども、一方に人欲の私を有するを以て性の發するがまゝに行ふを得ざること多し。是れ聖人が敎を立てゝ人を導く所以にして人性に存せざるものを强ふるにあらず。故に朱子は此の理を說いて、

蓋天命之性。率性之道。皆理之自然。而人物之所同得者也。人雖得其形氣之正。然其淸濁厚薄之稟。亦有不能不異者。是以賢知者。或失之過。愚不肖者。或不能及。而得於此者。亦或不能無失於彼。是以私意人欲。或生於其間。而於所謂性者。不免有所昏蔽錯雜。而無以全其所受之正。性有不全。則於所謂道者。因亦有所乖戾舛逆。而無以適乎所行之宜。惟聖人之心。淸明純粹。天理渾然無所虧闕。故能因其道之所在。而爲之品節防範。以立敎於天下。使夫過不及者有以取中焉。（中庸或問大全八頁）

と云へり。然れば聖人が敎を立てたるものは只品節防範の法則を立てたるに過ぎず。而して此の品節防範は人性に固有するものゝ外に於て立たるもののみにあらずして、皆人性に有するものにより

て之れが修養の法則を立てたるのみ。然れども聖人の立てたる教は天下社會に於ける一般の教化法則たるなれば、各個人は聖人の立てたる法則によりてその理想を建設して此れに由りてその人欲の私を去りて天理の本性に歸復する事を圖らざるべからず。此の如くして各個人が自己の立てたる理想を基礎として其の本性に復り、その性に有するすべてのものを擴充發展してその理想とする所の道を實現して己を修め人を治めて所謂王道の極に達するは是れ終極の目的に達したるものと謂ふを得べし。吾人が此の境に達すと雖も人性に有するものを悉く發展實現したるのみにして人性の外に能く爲し得たるにあらざるなり。朱子亦此の理を說いて、

蓋有以辨其親疏之殺。而使之各盡其情。則仁之爲教立矣。有以別其貴賤之等。而使之各盡其分。則義之爲教行矣。爲之別度人爲。使之有以守而不失。則禮爲教得矣。爲之開導禁止。使人有以別而不差。則知之爲教明矣。夫如是是以人無知愚。事無大小。皆得有所持循據守。以去其人欲之私。而復乎天理之正。推而至於天下之物。則亦順其所欲。違其所惡。因其材質之宜。以致其用。制其取用之節。以遂其生。皆有政事之施焉。此則聖人所以財成天地之道。而致其彌縫輔贊之功。然亦未始外乎人之所受乎天下者。而强爲之也。（同上九頁）

と云へり。是れ昔先王が天下後世の爲めに教化の法則を立てたることを述べたるものにして、個人の理想を建設するも修養法を設爲するも皆之を法則したるものに過ぎず。蓋し天下教化の法則なる

ものと個人理想の法則なるとは只全體と部分との相異のみにして同一のものと云はざるべからず。

(二)道の普　吾人の理想とすべき所當然の理卽ち理なるものはその性質普遍妥當的たるべきものにして一人之を行ふを得て萬人に通せず一國之を行ふを得て他國に通せざるが如きものは之を稱して道となすを得べからず。陳北溪が、

道猶レ路也。當初命二此字一。是從二路上一起レ意。人所二通行一方謂二之路一。一人獨行不レ得レ謂二之路一。道之大綱。只是日用間。人倫事物。所レ當レ行之理。衆人所二共由一底方謂二之道一。大概須二是就二日用人事上一說一。方見二得人所二通行一底意親切一。若推二原來歷一。不二是人事上剗然有二箇道理一如二此一。其根原皆是從レ天來。（性理字義卷下一頁）

と說けるは此の意に外ならず。蓋し道なるものはその性質より云へば所レ謂天地に充滿し人倫に通徹して時として然らざるなく處として在らざるなく、時間的にも空間的にも人生の全體に遍滿して存在するものにして、天道の宇宙界に遍滿充實せざる所なしと同一のものと謂ふを得べし。朱子此の意を說いて、

蓋所謂道者率性而已。性無不有。故道無不在。大而父子君臣。小而動靜食息。不假人力之爲。而莫不各有當然不易之理。所謂道也。是乃天下人物所共由。充塞天地。貫徹古今。而取諸至近。則常不外乎吾之一心。循之則治。失之則亂。蓋無須臾之頃可得而暫離也。若其可以暫合暫離。而於事無所損益。則是人力私智之所爲者。而非率性之謂矣。（中庸或問大全十六頁）

と云へり。此れに據れば道なる者は之を內にしては吾人の生活全體に涉りて存せざる事なき普遍的のものにして、之を外にしては人生社會の全體に亘りて通徹せざる所なきものなり。更に云へば王公大人たると匹夫匹婦たるとを問はず、聖賢君子より愚不肖に至るまですべてに遍在して悉く之れに由らざるを得ず。若し王公大人のみ之を行ふを得て匹夫匹婦は之を行ふを得ず。聖賢君子のみ之を行ふを得て愚不肖は之を行ふを得ざるものならば道と稱するを得べからず。中庸に君子父子夫婦昆弟朋友の交を以て天下の達道と爲し、知仁勇を以て天下の達德と爲したるを見れば、子思も此の五達道三達德を以て天下古今に普遍共通するものと爲せるは明かなりと謂ふべし。然るに是れ道の量を以て云ふものにしてその廣大普遍なること此の如きものあると共に其の微妙に至りて見聞の及ぶ能はざるものあり。中庸に此の理を說いて君子之道費而隱と云ひ朱子此の意を述べて、

道之用廣。而其體則微密而不可見。所謂費而隱也。卽其近而言之。男女居室。人道之常。雖愚不肖。亦能知而行之。極其遠而言之。則天下之大。事物之多。聖人亦容有不盡知盡能者也。然非獨聖人有

所不知不能也。天能生覆。而不能形載。地能形載。而不能生覆。至於氣化流行。則陰陽寒暑吉凶災祥。不能盡得其正者尤多。此所以雖以天地之大。而人猶有憾也。夫自夫婦之愚不肖所能知行。至於聖人天地之所不能盡。道盡無所不在也。故君子之語道也。其大至於天地聖人所不能盡。而道無不包。則天下莫能載矣。其小至於愚夫愚婦之所能知能行。而道無不體。則天下莫能破矣。道之在天下。其用之廣如此。可謂費矣。而其所用之體。則不離乎此。而有非視聽之所及者。此所以爲費而隱也。道之流行發見於天地之間。無所不在。在上則鳶之飛而戾于天者此也。在下則魚之躍而出于淵者此也。其在人則日用之間人倫之際。夫婦之所知所能。而聖人有所不知不能者亦此也。此其流行發見於上下之間。可謂著矣。子思於此指而言之。惟欲學者於此默而識之。則爲有以洞見道體之妙。而無疑。而程子以爲子思喫緊爲人處者。正以示人之意。爲莫切於此也。（中庸或問大全五十頁五十一頁）

と云へり。此れに據れば道はもと廣大無邊にして在らざる所包ねざる所なしと雖も、その微小に至りては幽玄隱微にして能く見聞の及ぶ所にあらず。蓋し費とはその理の用の廣大なるを云ひ、隱とはその理の體の幽玄隱微の妙あるを云ふ。故に朱子は「形而下者甚廣。其形而上者。實行乎其間。而無物不具。無處不有故曰費。費言其用之廣也。就其中其形而上者。有非視聽所及故曰隱。隱言其體微妙也。」と云へり。蓋し道なるものはその大外なくその小内なきものにしてその妙用の發見に至りてはかの禪家に所謂青々たる綠竹眞に匪ざる莫く粲々たる黃花般若に非ざる無きが如く、鳶は自然

に飛んで天に戻り魚は自然に深淵に躍るの妙あるが如く一事一物の微に至るまで悉く此の道の妙用の顯現にあらざるものなし。而して其妙用の顯著なる所以に至りては所以然の理の然らしむるものに外ならず。然れども道の用の外に別に見聞すべからざるものありて隱と爲すにあらず。天命の性率性の道實理にあらざるなく、天地の間流行するもの對待するもの皆此の理の用に非ざるなし。故に費と謂ふのみ。子思正に人の費處に於て隱微の理を認識せんことを欲す。人もし費處に於て隱微の理を認識すれば此の道の須臾も離るべからざるを知るべし。是れ朱子が「化育流行。上下昭著。莫レ非二此理之用一。所レ謂費也。然其所二以然一者。則非二見聞所一及。所レ謂隱也。」（中庸辛句第十二章）と云へる所以なり。然るに此の所以然の理は鳶飛魚躍の妙用の外に存在して萬象皆此の理より現出するにあらずして、鳶飛魚躍の妙用卽ち所以然隱微の理に外ならざるを知らざるべからず。然らずんば超絕的實在論となるの誤謬を生ずべし。

（三）道の不易　吾人の理想たるべき道なるものは此の如く古今を貫き東西に存する所謂普遍妥當性を有するものなれども、他の一面より見れば道は古今に亘り東西に通じ不變不易なるものにして條理秩然として亂れざるものなり。此の點より道を名づけて又理と云ふ。蓋し道は理想の普遍にして萬人通行するより名づけたるものなれども、理は理想の不變不易の常在にして聖人なるが爲めに存せず愚人なるが爲めに亡びざるより名づく。而して道の普遍は主として空間上より云へるものに

して理の常在は主として時間上より云へるものと見るを得べし。然れども道の普遍が時間に關係なく理の常在が空間に關係なしと云ふにあらず。陳北溪は朱子の意に本づいて道と理との區別を說いて、

道與理大概只是一件物。然析爲二字。亦須有分別。道是就人所通行上立字。與理字對說。則道字較寬。理字較實。理有確然不易底意。故萬古通行者道也。萬古不易者理也。理無形狀如何見得。只是事物上一箇當然之則便是理。則是準則法則。有箇確定不易底意。只是事物上正當合做處。便是當然。卽這恰好無過些。亦無不及些。便是則。如爲君止於仁。止仁便是爲君當然之則。爲臣止於敬。止敬便是爲臣當然之則。爲父止於慈。爲子止於孝。孝慈便是父子當然之則。（性理字義卷下七頁）

（遺稿）